ลมจากกรุงเทพฯ

バンコクの風

JSPS BANGKOK NEWSLETTER

2016-17 Vol.1

Luang Phabang

ルアンパバーン（ラオス）

JSPS BANGKOK

CONTENTS

JSPS 主催事業説明会の開催 01

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント 04

JSPS 同窓会情報 06

特集「科学技術イノベーション分野における日タイ協力の最近の取組」在タイ日本国大使館　一等書記官 ＩＣＴ政策、科学技術・イノベーション政策担当 インフラプロジェクト専門官（衛星等宇宙担当）恩賀 一 07

センター活動記録 09

コラム 10

学術情報（2016年4月－6月） 12

巻頭言

センター長挨拶

バンコク研究連絡センターの四半期ごとの活動報告書「バンコクの風」の２０１６年度第一号（２０１６年４－６月分）をお届けします。

昨日７月１０日の参議院選挙で、憲法改正勢力が３分の２を占める結果となり、これで衆議院も合わせて憲法改正の発議ができる体制ができあがりました。一年前の本欄で、安保法制の国会での審議に関連して、ＪＳＰＳの国際事業は、「人類の知的、精神的連帯」を強固にするためのものであり、ひいては「世界平和」の礎であると、ユネスコ憲章を引用して書き、またその精神を同じくする日本の平和憲法を守ることの大切さを書きました。

バングラデシュは、バンコクセンターが所管する国の一つですが、１０日ほど前その首都ダッカで、武装集団がレストランを襲撃、日本人７名を含む２０数名が犠牲になりました。日本人を標的にしたテロ事件だったのかは明確ではないにしろ、日本国内でも同じようなことが起こるのではないか、もう日本人だからということでテロの対象にならないという保証はどこにもないということです。

今回の選挙で、憲法改正への第一のハードルは取り除かれました。憲法審議会での審議など第二、第三のハードルがあるにせよ、最後のハードルは、国民投票ということになります。イギリスのＥＵ離脱に関する国民投票の結果を見ても分かるとおり（国民投票のやり直しを求める署名が４００万人集まったようですが、後の祭りで、一度決まったことは覆らない）、最後は国民がその責を負うことになります。

今後の改憲過程を、さらに危機感を持ってウォッチしなければと思う今回の選挙結果でした。

２０１６年7月１１日

JSPS バンコク研究連絡センター長　　山下　邦明

JSPS 主催事業説明会の開催

バンコク研究連絡センターは、タイを中心に担当国の大学等高等教育や研究機関を訪問し、JSPS 事業説明会を行っています。当センターが訪れた機関の紹介と事業説明会の様子をお伝えします。

メーファールアン大学を表敬訪問及び JSPS 事業説明会を開催（5 月 26 日）

タイ北部チェンライにあるメーファールアン大学にて初めて事業説明会を実施しました。同大学は、今年で創立 18 年の国立大学としては 2 番目に若い大学で、自然豊かな環境に囲まれた綺麗で広大なキャンパスが印象的でした。

表敬訪問では Darunee Wattanasiriwech 副学長らと面談し、日本の大学との共同研究への関心の高さを伺うことができました。

事業説明会には博士課程の学生らを含む若手研究者ら約 30 名の参加があり、JSPS の概要と国際事業について説明を行いました。

また、外国人特別研究員であった Dr. Sutthiwal Setha に日本での経験やその後の継続的な交流等についてお話し頂きました。

質疑応答のセッションでは、外国人特別研究員事業を中心に申請手順や申請資格について積極的に質問があがり、大変有意義な事業説明会となりました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：http://jsps-th.org/2016/05/26/3942/）

チェンマイ大学を表敬訪問及び JSPS 事業説明会を開催（5 月 27 日）

チェンマイ大学で JSPS 事業説明会を開催しました。当センターは 2013 年以降、毎年同大学での事業説明会を実施しています。

事業説明会に先立ち表敬訪問を行い、日本の多くの大学との MoU に基づくダブルディグリープログラム等により、学生モビリティ向上に取り組んでいるというお話しを伺うことができました。

説明会には他大学からの参加もあり、若手研究者を中心に 50 名以上が参加しました。

当日はアメリカのオバマ大統領が広島を訪問した歴史的な 1 日でもあり、山下センター長による JSPS の概要説明では、冒頭で「平和と学術の交流の促進」について触れられました。

また、JSPS 事業経験者の Dr. Narongchai Autsavapromporn と Dr. Saisamorn Lumyong にそれぞれ日本での研究、生活の様子や申請に関するアドバイス等についてお話しいただきました。さらに、チェンマイ大学の伊藤信孝客員教授による講演も行われ、ご自身のご経験に基づき学生と職員の国際化をテーマにお話しいただきました。質疑応答では、日泰両研究者からアドバイスがあり、参加者らにとっても有意義な説明会となりました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：http://jsps-th.org/2016/05/27/3966/）

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

シーナカリンウィロート大学で JSPS 事業説明会を開催（5 月 31 日）

シーナカリンウィロート大学にて 2014 年以来 2 回目となる JSPS 事業説明会を実施しました。同大学は、タイのリーディング大学として教員や公務員を多く輩出している国立大学です。

説明会には約 20 名の研究者が参加し、明治大学 ASEAN センター長小沼廣幸特任教授が冒頭の挨拶で「自然災害等の様々な課題克服のために科学は重要である」と述べられました。

JSPS の概要及び国際事業の説明後、論文博士号取得希望者に対する支援事業（RONPAKU）を通じて東京医科歯科大学で博士号を取得された Dr. Sorasun Rungsiyanont から日本での研究の様子、日本の文化や同事業から学んだことについて、ユーモアを交えながらお話しいただきました。

質疑応答のセッションでは、外国人特別研究員事業への申請条件等について複数の質問があり、参加者の関心の高さや積極性が伺えました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：http://jsps-th.org/2016/05/31/3980/）

カセサート大学カンペンセンキャンパスで JSPS 事業説明会を開催（6 月 2 日）

昨年に引き続き、カセサート大学カンペンセンキャンパスで JSPS 事業説明会を実施しました。同大学は、タイにおいて最初の農業系大学として 70 年以上の歴史を誇り、現在は複数の学部を有していますが、農学・森林分野は現在でも世界的に高い評価を得ています。

説明会では、同大学の Seksom Attamangkune 農学部長による開会の挨拶があり、引き続き JSPS の概要説明及び JSPS 国際事業の紹介を行いました。

また、論文博士号取得希望者に対する支援事業（RONPAKU）を通じて京都大学で博士号を取得され、現在 JSPS タイ同窓会（JAAT）理事でもある Dr. Suratwadee Jiwajinda から同事業の申請手順や日本での滞在経験についてお話しいただきました。

質疑応答のセッションでは、日本留学への関心のある学生からの質問に対し、文部科学省の奨学金による日本留学経験のある同大学農学部研究・学術サービスセンター主任 Dr. Tiwa Pakoktom からもご自身の経験に基づいてご回答いただきました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：http://jsps-th.org/2016/06/02/3999/）

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

ブラパー大学を表敬訪問および JSPS 事業説明会を開催（6 月 27 日）

ブラパー大学にて初めて JSPS 事業説明会を開催しました。同大学はタイ南東部チョンブリー県に位置する国立大学で、3 キャンパスに約 30 の学部があり、約 4 万人の学生が在籍しています。また、前身の教育専門学校時代を含めると 60 年以上の歴史を有し、現在は国際化にも熱心に取り組んでいます。

説明会前には Witawat Jangiam 学長補佐を表敬訪問しました。

説明会では、Witawat 学長補佐の開会の挨拶に続いて山下センター長が JSPS の概要を説明し、古屋副センター長と大田国際協力員が JSPS 国際事業の紹介を行いました。

参加者の中には、外国人特別研究員事業への応募経験のある研究者も複数おり、応募までの準備期間や日本人受け入れ研究者との事前打ち合わせの重要性など、自身の経験を積極的に語ってくださいました。当センターとしては、同大学で初めての事業説明会でしたが、約 50 名の参加のもと、非常に活発な説明会となりました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：http://jsps-th.org/2016/06/27/4080/）

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

バンコク研究連絡センターでは、対応機関であるタイ学術会議（NRCT）と学術セミナーを共催しているほか、バンコクで実施される国際的な学術シンポジウムやイベントに積極的に参加し、ASEAN 地域の最先端の学術情報の収集に努めています。

在タイ日本国大使館・JASSO 主催「JUNE Fair」に出展（6 月 6, 8, 10 日）

2016 年 6 月 6 日から 10 日まで、在タイ日本国大使館で及び（独）日本学生支援機構（JASSO）主催の 「JASSO, University, Nihongo-institutions Education Fair in Embassy of Japan (JUNE Fair)」が同大使館にて開催され、JSPS バンコク研究連絡センターも 6 月 6 日、8 日、10 日の 3 日間、ブース出展を行いました。

JUNE Fair は、日本留学に関心のある学生等に対しその促進を図ることを目的としており、今回の JUNE Fair には、30 の日本の大学や日本語学校などがブースを出展し、タイの高校生や学生を中心に約 500 名の参加がありました。

当センターは JSPS の国際事業の紹介を行った他、このイベントのために日本から来られていた大学関係者らと情報交換を行うことができました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：http://jsps-th.org/2016/06/10/4038/）

第 7 回在タイ大学連絡会（JUNThai）に参加（6 月 13 日）

在タイ日本国大使館で第 7 回在タイ大学連絡会（JUNThai）が開催され、タイに拠点を置く大学の代表者及びオブザーバーを含め 43 名の参加がありました。

第 1 部では、「産学連携」をテーマに芝浦工業大学国際部　杉山修次長及び明治大学 ASEAN センター　小沼廣幸センター長による講演がありました。

芝浦工業大学は GTI コンソーシアム（Global Technology Initiative Consortium）に基づき、東南アジアを中心とした産学官連携の強化に取り組んでおり、その中でグローバル PBL（Project Based Learning）というプログラムの紹介があり、これに関して参加者から多くの質問や意見がありました。

続いて、小沼センター長からは明治大学 ASEAN センターの概要、タイにおける産学連携と企業訪問及び明治大学・カセサート大学・シーナカリンウィロート大学の学生らによる模擬国連について紹介がありました。小沼センター長は国連機関での勤務経験をお持ちで、国際機関の中での日本人のプレゼンスや国連へのインターン制度についても触れられました。

第 2 部では、議長より JUNThai への新規参加校として、東北大学と創価大学の紹介があった他、（独）日本学生支援機構（JASSO）バンコクオフィス及び在タイ日本国大使館より前週開催された JUNE Fair（上記記事参照）について報告がありました。また、JUNThai の Facebook 開設を含む今後の情報発信のあり方や、日本政府によるタイの国費留学生の状況等についても協議されました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：http://jsps-th.org/2016/06/13/4045/）

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

産業人材育成円卓会議“2nd Round Table Conference on Human Resources Development”に参加（6 月 20 日）

産業人材育成円卓会議“2nd Round Table Conference on Human Resources Development”に参加しました。

佐渡島志郎在タイ日本国特命全権大使による開会の挨拶では、今回の会議の内容は正式なイニシアチブとして日本政府にも提案したい旨が述べられ、続いてタイ国首相府 Kobsak Pootrakool 氏による基調講演では、タイの今後の発展のポイントとして「新規インフラの整備」「新たな産業の創出」「新たな産業を発展させる人材育成」の 3 つを挙げられました。

そして、「日泰人材育成イニシアチブ」をテーマに、タイの関係者らトップ 6 名によるパネルディスカッションが行われました。ディスカッションでは、現状ではタイのエンジニアが質・量ともに不十分であること、キャリアパスや報酬の問題により優秀なエンジニアが流出していることが指摘されました。これに対し、単純にエンジニアの数を増やすだけではなく、よりクリエイティブで優秀なエンジニアの育成やタイへ継続的な支援（投資）が必要であるという趣旨の発言もありました。

また、第 2 部のディスカッションには、「タイの製造部門の若手エンジニアのキャリア開発」をテーマに日系企業、タイの大学教授及びタイの若手エンジニアらが参加し、それぞれの立場からの率直な意見で議論が進み、非常に活気のあるディスカッションとなりました。

そして、最後のセッションでは、東京工業大学 三島良直学長が「東京工業大学の教育改革とタイでの活動」と題して、タイの複数のリーディング大学との連携による「TAIST(Thailand Advance Institute of Science and Technology)-Tokyo Tech」という国際共同事業の取り組みの他、学科等の再編やカリキュラムの刷新等の教育改革の取組事例についてご講演されました。

（同会議については、7 ページの特集記事内でも紹介があります。）

（JSPS Bangkok Office ホームページ：http://jsps-th.org/2016/06/20/4064/）

タマサート大学－創価大学リエゾンオフィス開所式に出席（6 月 28 日）

2016 年 6 月 28 日、創価大学のタイ拠点事務所となる「タマサート大学－創価大学リエゾンオフィス」がタマサート大学内に開設され、それを記念して開所式が執り行われました。

開所式には両大学の学長、関係者の他、佐渡島志郎在タイ日本国特命全権大使及びタイに拠点を持つ日本の大学等の関係者が多数出席し、当センターも出席しました。

式では、タマサート大学 Dumrong Adunyarittigun 教養学部長の開会の挨拶で、創価大学との交流やリエゾンオフィス設置に至った経緯等が語られ、また、タマサート大学 Somkit Lertpaithoon 学長、創価大学 馬場善久学長の両学長による歓迎の挨拶では、両校の今後益々の交流発展を期待する旨を述べられました。

そして、佐渡島特命全権大使によるスピーチでは、祝辞を述べられるとともにタイと日本の学術交流の層の厚さや、来年が ASEAN 発足 50 周年並びに日泰修好 130 周年という記念すべき年であることにも触れられました。

その後、タマサート大学教養学部と創価大学国際教養学部の学部間協定の署名式に続いて、新事務所前にて代表者らによるテープカットが行われ、終始盛大な雰囲気の中での開所式となりました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：http://jsps-th.org/2016/06/28/4086/）

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

バンコク研究連絡センターは、日本学術振興会の国際交流事業で訪日経験のある研究者の組織である「JSPS 同窓会」の支援も積極的に行っており、現在管轄地域内に同窓会が組織されているタイ・バングラデシュ・フィリピン・ネパール JSPS 同窓会の活動支援、また、ベトナム、インドネシアでの新規同窓会設立に向けても支援を行っています。

2016 年度第 1 回 JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会の開催（4 月 27 日）

今年度第 1 回目の JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会をタイ学術会議（NRCT）で開催しました。

理事会では、JAAT の会計報告があった他、Sunee 会長より地方大学での JAAT 学術セミナーの実施について議題提起がありました。これについては、セミナーの形態、内容や予算等について各メンバーから様々な意見があり、活発な議論がなされましたが、課題や懸案事項も残り、今後は別途ワーキンググループを立ち上げ検討を続けていくこととなりました。

また、山下センター長より今年度の JSPS 事業説明会及び 7 月の JSPS フィリピン同窓会（JAAP）との共催シンポジウム及び 8 月の NRCT-JSPS 共催の学術セミナーについて報告がありました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：http://jsps-th.org/2016/04/27/3906/）

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

今回の特集では、在タイ日本国大使館一等書記官 恩賀一氏に、タイ国内の科学技術イノベーション分野の動向について、特に同分野での日タイの連携に焦点を当てた内容でご寄稿いただきました。

恩賀書記官は、総務省から２０１４年７月に同職にご着任され、本稿中にも記述のある科学技術連絡会（タイに拠点を置く日系科学技術関係機関等による定例会議）でも議長を務められるなど、科学技術イノベーション分野を中心とした日本とタイの連携強化に尽力しておられます。当センターも関係機関の一つとして同連絡会に参加し、日タイの同分野に関する情報発信及び収集を図っています。

※寄稿の記事・論文、図表、写真等の著作権は執筆者に帰属しています。無断複製又は無断転載はおやめください。

科学技術イノベーション分野における日タイ協力の最近の取組

在タイ日本国大使館　一等書記官
ＩＣＴ政策、科学技術・イノベーション政策担当
インフラプロジェクト専門官（衛星等宇宙担当）
恩賀　一

１．はじめに

タイは、これまでの経済発展を通じ、一人当たりＧＤＰが中程度の水準（中所得）に達していますが、今後は「中所得国の罠」に陥ることなく持続的に成長し、高所得国入りができるかどうかという中長期的な課題を抱えています。
以上につき、１９６１年から策定されてきている５ヶ年計画である国家経済社会開発計画について、２０１６年１０月から実施予定の第１２次計画の骨子案（２０１５年９月時点）においても、前述のリスクが明確に認識されています。そして、高所得国入りを目指すための産業構造転換として、サービス部門の成長率を年平均７％、Ｒ＆Ｄ投資額をＧＤＰ比２％、同投資の官民割合を３：７にする等の目標を掲げ、今後の政策の方向性等として、研究開発の推進や労働生産性の向上などが検討されています。
本稿では、以上の課題解決に向けて、当館が日タイの産官学関係機関と連携して取り組んでいる最近の活動等を簡単にご紹介させていただきます。

２．イノベーションワークショップ

２０１５年９月、当館、ＪＥＴＲＯバンコク、タイのＮＥＳＤＢ（国家経済社会開発委員会）及び科学技術省により、特に自動車産業に焦点をあてた「タイ産業におけるＲ＆Ｄと人材育成にかかる提言」を共同で発表しました。詳しくは、当館のウェブページ（http://www.th.emb-japan.go.jp/jp/policy/jointpolicy-remommendation-2016.htm）をご覧下さい。
２０１６年３月以降は、以上に関連する自動車部品分野のほか、宇宙分野、食品加工分野、医療分野、ＩＣＴ・デジタル分野及び知的財産分野について、ＮＥＳＤＢ及び科学技術省のみならず、各分野におけるタイの関係機関からも参加も得て、議論してきました。現在は、これらの議論を踏まえ、各分野におけるＲ＆Ｄと人材育成に関する提言の取りまとめに向けた準備をしています。

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

３．人材育成円卓会議

２０１５年１１月、日ＡＳＥＡＮ首脳会議の際に、安倍総理が「産業人材育成協力イニシアチブ」を公表しました。これを踏まえ、日本の在外公館では初の試みとして、２０１６年３月に、ＪＩＣＡとの共催、タイのネーション・マルチメディア・グループの協力の下、第１回人材育成円卓会議を開催しました。ＪＩＣＡが検討しているプロジェク等や海外産業人材育成協会（ＨＩＤＡ）が実施する海外人材育成の取組等についてプレゼンテーションを行うとともに、タイのティラキアット教育副大臣をはじめ日タイの産官学関係者をパネリストに迎え、タイにおける産業人材ニーズ及びその人材ニーズに対応するために行われるべき取組について議論を行いました。詳しくは、当館のウェブページ（http://www.th.emb-japan.go.jp/jp/jis/2016/1606.htm）をご覧ください。

（写真：第２回人材育成円卓会議）

以上に引き続いて同年６月に開催した第２回人材育成円卓会議では、コブサック首相府政務官から製造業等の人材育成における日本との協力の必要性について言及がなされるとともに、タイのピチェート科学技術大臣や三島東京工業大学学長をはじめ日タイの産官学関係者をパネリストに迎え、日タイ産業人材育成協力推進のための方向性等について議論しました。詳しくは、当館のウェブページ（http://www.th.emb-japan.go.jp/jp/jis/2016/1611.htm）をご覧ください。
これらの議論を踏まえ、現在、当館において、日タイ間の産業人材育成協力の具体化に向けた検討を進めています。

４．おわりに

科学技術イノベーションは、社会経済の発展や保健・エネルギー・農業・環境などの地球規模課題の解決に向けて、その果たすべき役割が不可欠であり、様々な社会変化をもたらす中、これを外交に活かす科学技術外交の取組が日本でも本格化しつつあります。
当館では、タイとの科学技術外交について、日タイの産官学関係機関や専門家の間での連携を強化し、タイが直面する課題に協力して取り組むことを目的とする情報交換・共有の場として、科学技術連絡会を設置しており、現在、国立研究開発法人、独立行政法人（地方も含む）、大学、国際機関やタイ関係機関など１８機関等が参加しています。
今後、当館としても、このプラットフォームも活用しながら、日タイの科学技術イノベーション協力の更なる拡がりと深まりを引き続き進めていく予定ですので、ご関心等ある関係者の皆様におかれましては、是非当館までご連絡等頂ければ幸甚です。

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

センター活動記録

バンコク研究連絡センターの 2016 年 4 月から 6 月期のその他活動は以下のとおりです。センターにはタイ及び ASEAN 諸国との学術の国際交流を目的とし、日本やタイの研究者や高等教育関係者が訪れます。当センターは訪問者への現地での便宜供与や学術情報の交換・助言を行っています。詳しい活動記録は当センターウェブサイト（http://jsps-th.org/）に掲載しておりますのでご参照ください。

4 月

5 日　京都大学東南アジア研究所バンコク連絡事務所長 豊原治彦准教授の来訪

8 日　明治大学アセアンセンター長 小沼廣幸特任教授の来訪

21 日　上智大学グローバル教育センター 浦元義照特任教授の来訪

25 日　国際交流基金バンコク日本文化センター 吉岡憲彦所長の来訪

5 月

11 日　京都大学 ASEAN 拠点及び企画・情報部企画課職員の来訪
ASIA CENTRE 加藤保之氏の来訪

24 日　マレーシア科学大学日本文化センター 副田雅紀センター長の来訪

6 月

3 日　創価大学タイ事務所 小林一茂講師の来訪

7 日　九州大学学務部留学生課 松尾勇太職員の来訪

8 日　理研シンガポール事務所 津澤元一所長の来訪

9 日　北海道大学大学院工学研究院 佐藤靖彦准教授の来訪
ブラパー大学インターナショナルカレッジ講師の来訪

17 日　大分大学医学部 内田智久助教の来訪

22 日　UNESCO ダッカ事務所（バングラデシュ） 大安喜一氏の来訪

24 日　京都大学東南アジア研究所バンコク連絡事務所長 豊原治彦准教授の来訪

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

大田国際協力員の思いっきりタイ験記

こんにちは、バンコク研究連絡センター三代目国際協力員の大田です。今号より本コラムを担当させていただきます。本コラムでは、現地での生活や体験をもとにタイの文化や魅力を紹介していきたいと思います。

早速ですが本題へ。第１回目のコラムではタイのソンクラーンについて紹介します。ソンクラーンについてはご存知の方も多いと思いますが、まずは簡単に説明を…

【ソンクラーン】

ソンクラーンはタイの旧正月で、例年４月半ばの数日間が祝日となります。本来は新年のお祝いをし、仏像のお清めを行っていたものが、現在では水を掛け合うお祭りとしての色合いが濃くなり、日本でも「水掛け祭」と呼ばれています。この期間中はタイ国内各地で様々なイベントも開催され、国外からも大勢の観光客がここタイに集まります。

ソンクラーン期間中のバンコク・フワランポーン駅の様子
現在でも仏像のお清めが行われている

渡泰前、チェンマイ（タイ北部の都市）の知人にソンクラーンの過ごし方について相談したところ「ソンクラーンを楽しみたいならカオサン通りに行ってお祭りを楽しむべし」というアドバイスがあり、それに従うことにしました。

まずは、ソンクラーン参加（参戦）時の基本スタイルについて。

サングラスまたはゴーグル（衛生面からも強く推奨します）

ウォーターガン（大きい方が威力も持久力あるが、移動時にやや疲れる）

動きやすい服装（ハーフパンツは水着でも代用可）
※着替えは不要　結局濡れるし、濡れてもすぐ乾く

サンダルまたはスニーカー（ラフすぎるサンダルは危険）

簡単に言うと海に遊びに行くときの恰好でＯＫです。
また、関連グッズは、この時期になると多くの商店や露店で販売しているので現地調達が可能です。こんな格好でカオサン通りへと向かいました。

【カオサン通り】

カオサン通りはバンコクの観光名所の一つで、普段から世界中のバックパッカー達が集まっています。

カオサン通りの様子
（こんな光景が通りいっぱい続いている）

最寄駅からカオサン通りまではやや離れているので、トゥクトゥク（三輪自動車）での移動が便利です（ただし、この期間中の料金は高めに設定されています）。

到着したらすごい数の人！さすが世界中から人が集まる場所だけあって、タイ人よりも外国人（自分も含め）が多い！その人混みの中では皆すれ違い様に水を掛け合っていて、四方八方から水が飛んできます。中には氷水をかけてくる人もいますが、猛暑のため、それもまた爽快でした！

また、「ディンソーポーン」という白い粉を水に溶いたものを顔に塗られるため、皆帰る頃には顔が真っ白になっています。

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

【S2O】

続いてタイ語の先生に教えてもらった「S2O」というイベントを紹介します。S2O はソンクラーンに合わせて開催される野外音楽フェスで、一言で表現するなら「水と音楽の融合」。ライブ中はスコールのような水があらゆる方向から放たれ、ここで浴びる水の量はカオサン通りの比ではありません！

数年前から始まったようですが、世界的に有名な DJ も出演することから、タイ国内だけでなく国外からの参加者も大勢いました。

会場の様子
（写真には写っていないが、足元は水たまりだらけ）

入場券
（当日購入可）

入場券は事前に WEB から購入もできますが、直接会場で当日券（写真右）を購入することもできます。また、会場外にはフードコートもあり、疲れたらそこで休憩して再入場することも可能なので、野外フェスや音楽好きの方にはおすすめしたいイベントです。

【アユタヤ】

ソンクラーン中にアユタヤにも行ってきました。アユタヤはバンコクから北へ約 80 キロ離れたところに位置するタイの定番観光スポットで、「14 世紀半ばに建都されたアユタヤ王朝の都として貿易によって 400 年以上に渡って栄えたが、ビルマによる攻撃によって滅ぼされた」という歴史があります。

バンコクからアユタヤまでは地下鉄と快速列車を乗り継げば、往復 1,000 円未満で行けます（所要時間は片道 2 時間）。現地に着くとこちらでもトゥクトゥクが観光客を待ち構えていますが、一人でゆっくり観光したいなら自転車かバイクのレンタルもあり、自分は自転車で回ることにしました。

自転車をこぐこと 15 分ほどで遺跡群に到着し、そこではその空間だけ時が止まったかのような遺跡たちがあちこちに点在しています。左下の写真を見るとソンクラーンとは無縁のようですが、右下の写真のようなソンクラーンを感じさせる光景にも出会いました。

ソンクラーン中でも穏やかな時間が流れるアユタヤの遺跡群（写真はワット・チャイワッタナーラーム）

当日の最高気温は 40 度越え！
像も水浴びでクールダウン

アユタヤで見かけたソンクラーン仕様の車
上述の白い粉を派手に塗られたようだ…

また、「川エビ」と「ロティ・サイマイ」というアユタヤの名物スイーツがおいしいと聞いており、楽しみにしていたのですが、事前に調べていたレストラン等は全部閉まっていました（正月休みということで閉店する店もあるようです）。。

以上、ソンクラーンの体験記でした。わずか数日でしたが、非常に密度の濃い時間を過ごすことができました。皆さんも是非アメージング・タイランドをご体験ください！

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

■政府が国境地域での学生向け奨学金として 38 億バーツの資金提供を計画

政府が教員養成事業を計画している。有能で優れた学生として選ばれると、学士課程を修了するまで奨学金を受け取ることができる。この奨学金には、生徒は自身の出身地で公務教員として従事しなければならないという厳しい条件があり、もしこの条件を守らなければペナルティがある。

2016 年 3 月 29 日午後 4 時、官邸にて政府広報官である Sansern Kaewkamnerd 少将は、教育省は後発地方での教員養成事業を提案したとする政府声明を発表した。教員は生徒にとって模範となる必要があるため、この奨学金事業の対象として選ばれた学生は GPA（評価点平均）が 3.00 以上で、かつ以下の基準を満たさなければならない。

・同事業において国境地域または南部 3 県に居住する学生は、学士課程での勉強のために年間一人当たり 10 万バーツの奨学金を受給することができる。

・同事業において国境地域に居住しない学生は、奨学金を受給できないが、出身地に従事する公務教員として採用される。

・教職または教育分野以外の学士課程を修了し卒業した学生は、専門的な教員資格を取得するためにさらに 1-2 年の学習プログラムを履修しなければならない。

生徒が一旦公務教員になると、生徒らがタイ国内または国外で修士課程の勉強ができるよう、政府は 38 億 4200 万バーツの予算を計上する。

政府は、この事業の期間を 2016-2029 年までの 14 年間とするという原則を認めた。しかし、首相はこの事業は 2016-2018 年度の期間のみで実施すべきだと提案した。さらに、この事業は民生選挙によって選ばれた政府に対し、教育的国家改革内で更なる実施のために申し送りすると述べている。加えて、学生らが教員として地元に戻らなかった場合、その資金を追跡し回収するための仕組みも作られるだろう。副大臣の Wissanu Khrue-ngam 氏は、貸付に関する教育法はこの事業も対象とすべきであると述べた。

（2016 年 4 月 4 日　タイ教育省 HP）

■アジア開発銀行（ADB）が研究・イノベーション開発向けに 3 億米ドルの融資を提案

2016 年 4 月 22 日、教育省 Chandrakasem Lobby 室にて教育省副大臣の Teerakiat Charoensettasin 氏は教育省事務次官付 Duriya Amatawiwat 氏と共に、アジア開発銀行（ADB）タイ駐在員事務所所長 根岸靖氏を迎え、教育計画・協力について協議した。

根岸氏は「ADB は“研究と技術イノベーションに向けたインフラ”事業を後援するため 3 億米ドルの融資を提案した。」と述べた。この事業の目的は次のとおりである。

・研究とイノベーション創造の可能性を拡大させる

・共同研究事業を振興する

・学術の質と学術事業を発展させる

・卒業生が労働市場の要件を満たす適切なスキルと知識を習得するよう、指導の質を向上させる

2 億米ドルが共同応用研究事業に割り当てられる予定である。この資金は、経済成長機構として 10 の産業によるクラスター内における S&T 分野の卓越した研究拠点を設立するために、大学の学部に転嫁される。

残りの 1 億米ドルは、材料や機器の購入、教員や研究者の育成、学術会議の企画などを通じて、大学の様々な一般研究事業を創造、振興するために割り当てられる。

Teerakiat 氏は「この事業は卓越した研究拠点と他の研究センターの発展をともに支援するだろう。」と述べた。そのため、同氏は検討への次なる一歩としてこの融資事業を起案するため、ADB は高等教育委員会（OHEC）と連携することを提案した。さらに、職業教育システムを向上させる共同事業に関し、職業教育委員会（OVEC）の担当者とも連携するよう ADB に求めた。

（2016 年 4 月 25 日　タイ教育省 HP）

■大学暦の変更に再び着手

大学生のアカデミックイヤー（大学暦）が旧システムに戻され、年間で最も暑い時期を避けるため、6 月に始まり 3 月に終了することを管轄機関が発表した。

大学評議会議長総会（AFCT）は、4 月と 5 月の猛暑は授業への出席には適しておらず、休暇や観光により適している期間であると主張し、大学暦の変更を発表した。

現在のシステムでは、第 1 セメスターは 8 月から 12 月で、第 2 セメスターは 1 月から 5 月にかけて開講される。

大学は 6 月から 7 月まで休講となる。AFCT が復活させようとしている旧システムでは、大学暦は 6 月から 10 月及び 11 月から 3 月となる。

現在のシステムは、大学暦がタイ以外の ASEAN 各国と同じで、約 2 年間実施されてきた。しかし、多くの AFTC メンバーは、現在のシステムはタイの生活様式、文化、気候に適さないと見ている。

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

AFCT 議長の Rattakorn Kidkarn 氏は「大学暦の変更は同総会によって実施された調査に従うもので、その調査では AFCT の 86.3%の教育者及び学生らが ASEAN の大学暦をタイに導入することに反対しており、賛成したのは残りの 13.6%の教育者のみであったことが示された。」と述べた。

また、同氏は「その結果、ラチャパット大学 38 校とラジャマンガラ工科大学 9 校は、現在の大学暦を旧システムに戻すことが認められる予定である。」とも述べた。この決定は各大学の協議会の裁量に任される。

（2016 年 4 月 26 日　Bangkok Post 紙）

■アジアの科学者トップ 100 にタイ人研究者 2 名がランクイン

前副首相を含むタイの科学者 2 名が、ノーベル賞受賞者である屠 呦呦（Tu Youyou）氏らとともに「アジアの科学者トップ 100（AS100）」に名を連ねた。

このリストは Asian Scientist 誌によって初めて編さんされたもので、タイ国民である Yongyuth Yuthavong 氏と Agachai Sumalee 氏の名前が載っている。

Yongyuth 氏はオックスフォード大学で有機化学の PhD を取得し、科学分野のみならず政界でもその業績はよく知られている。同氏は 2006 年に科学技術大臣に任命され、2014 年から 2015 年にかけて副首相も務めた。

政界外では、Yongyuth 氏はマヒドン大学に 30 年近く従事し、研究において大きな役割を果たした。さらに、科学技術省下のタイ国立遺伝工学・バイオ技術センターやタイ国立科学技術開発庁（NSTDA）などの重要な機関の立ち上げにも携わった。

2004 年には、マラリア研究で傑出した役目を果たし、タイの科学技術研究システムを発展させたことが評価され、第 9 回日経アジア賞（科学技術部門）を受賞した。

その一方で、現在、キングモンクット工科大学ラカバン校（KMITL）の著名人である Agachai 氏も素晴らしく注目度を高めている。

Agachai 氏は、KMITL で土木工学の学士課程を優秀な成績で修了した後、リーズ大学へ進学した。ここで同氏は 2000 年に科学（工学）の修士号を取得すると同時に、同大学交通科学研究所の企画・工学優秀賞を受賞し、2014 年には哲学博士号を取得した。

2004 年から 2006 年までの間、交通科学研究所でシニア研究フェローとして研究を行い、2006 年から 2012 年には香港理工大学で土木・構造工学科の助教として従事した。

現在、同氏は KMITL の学長補佐兼スマートシティ研究センター長である。

高速道路の渋滞を緩和させる自動制御交通システムを開発するため、交通流アルゴリズムと高速道路センサーを結び付けたことで、2014 年に APEC 科学賞イノベーション・研究・教育部門（ASPIRE）を受賞した。

AS100 によって評価されたことは、両氏に栄誉を与えたにすぎない。

AS100 のリストには、各国の最も輝かしい科学者ら数名も含まれている。そして、日本はその中で最多となる 29 名が名を連ね、中国が 20 名、インドが 15 名と続いている。

また、韓国の研究者が 9 名、フィリピン、香港、台湾が各 5 名、ベトナム 2 名、マレーシア 1 名もランクインしている。

南洋理工大学助教授で、Asian Scientist 誌の創設者でもあり編集長の Dr. Juriana Chan は、次のように述べた。「我々は AS100 のリストを用いて、科学的知識をさらに追求、技術的限界を突破し、そして人々の生活を改善するため、質の高い研究に対する正当な評価をアジアの科学者らに与えたい。」

同氏はまた、このリストがコラボレーションの可能性を切り開くことを期待しており、「我々は、その地域の優秀な科学者と共に研究をしたいと考えている各地の研究者の関心を高めるよう努めたい。」と述べた。

（2016 年 5 月 6 日　The Nation 紙）

■職業教育と日本との連携

2016 年 5 月 10 日、在タイ日本国大使館の寺島書記官、（独）国立高等専門学校機構と日本の高等専門学校（高専）の代表者らがタイ教育省を訪問し、教育省 Dapong Ratanasuwan 長官はタイ職業教育委員会事務局（OVEC）の Chaipruek Serirak 事務局長とともに一行を温かく歓迎した。

寺島書記官は次のように述べた。「タイの職業教育の指導と学習方法は広く受け入れられており、職業訓練を受けている学生らは学問的にも職業的にも技術を磨くことができる。このため高専は喜んでタイの職業教育を支援する。」。さらに高専に従事する教員は PhD を取得し卒業している。産業ビジネスは時間とともに変化するので、学生らはまた、授業外に自分達自身で学習するために指導を受けている。

最も重要な要素は、民間企業は自社の人材を雇用する責任を有する一方で、多くの日本の産業はより多

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

くの卒業生を輩出することを高専に期待しているということである。教育省によれば、日本企業はタイで投資をしている。つまり、教育省としては、日本企業側の要件に応え、タイと日本のビジネス企業の成長を支援する人材を輩出する必要があるということである。高専に対応するタイの職業教育を発展させるためには、カリキュラム、教員と指導・学習教材、この 3 つの主要なカギがある。教育省は、高専を見習い、OVEC がいくつかの職業学校を選択できるようにして、それらのカギを調整、応用すべきである。

教育省は割り当てられた予算下に置かれた状態で、タイの職業教育の改善に対する高専の提案を検討する。

泰日高専として OVEC 職業学校を向上させるフレーム作り

1. 管理者・教員・関係者間の相互理解を生み出すことで職業大学の改善方法を検討する

2. 指導教材の開発に加え、指導・学習計画を策定するために日本の専門家の支援を受け入れる

3. 職業大学を研究し、分析するためのデータベースを立ち上げる

4. タイの日本企業のニーズに応えるため、日本の職業カリキュラムとの比較を通しタイの職業カリキュラムを見直し、タイの学生に共通の証明書を発行する

5. 人材開発、長期・短期的情報、公正な評価を伴う経験交換を支援する

6. タイ国内外に民間及び公共部門のネットワークを構築する

7. タイの教員と学生向けの日本政府奨学金を要請する

8. 指導・学習開発を支援するハードウェアやインフラを見出す

9. 国際標準の研究と主要ジャーナルへの論文掲載を促進する

10. ネットワークを改善するため日泰間でタイ人と日本人研修生の交換を促進する

11. 日本語プログラムやミニ日本語プログラムを立ち上げる

12. タイの職業学校を泰日高専に格上げする

（2016 年 5 月 16 日　タイ教育省 HP）

■キングモンクット工科大学がサイエンス・インキュベータ・スクールを立ち上げ

タイで初となる国際科学付属学校が動き出している。

この学校は、学生が 21 世紀のイノベーターになれるよう、彼らに養成機関を提供するキングモンクット・ラカバン工科大学（KMITL）の取り組みの一環として開校する。

KMITL の Suchatvee Suwansawat 学長は「我々は 2020 年までにアジアでトップ 10 に入る科学技術大学となることを目指している。この壮大な目標を達成すべく、我々はよい人材を必要としており、それゆえできるだけ早く生徒を育成し始めなければならない。」と述べた。

しっかりと育成されたマタヨン（中学校/高等学校の中等教育に相当）6 年の卒業生は、KMITL またはタイや海外の一流大学で高等教育を引き続き進める基本的な知識、態度、能力を有していると期待されている。

キングモンクット工科大学付属国際学校（KMIDS）は、KMITL の「教育大学改革」のもと運営を行い、KMIDS は来年 8 月にスタートする 2017 年度入学の生徒から願書の提出がある予定で、願書の受付は 8 月 22 日から 10 月 31 日までとなっている。

入学試験は 11 月に予定されており、各クラス 250 名の生徒を採用予定で、この施設建設は開校時までには完了する見込みである。

KMIDS はマタヨン 1～6 年のクラスを提供し、ネイティブスピーカーによる英語で授業が行われる。

コースとプログラムは STEAM（つまり科学・技術・工学・数学の STEM に一般教養（Art）を加えたもの）のコンセプトに基づき策定される。

このコースは科学的・数学的法則や理論を重視しているだけではなく、そのコースによって生徒は真のイノベーションを創造するため、自身のアイデアに一般教養や独創力を応用することが可能となり、生徒は問題に対し、革新的な解決策を思考、研究、分析、発見するようになる。

タイ教育省およびアメリカ教育者から承認され認定を受けた KMIDS のカリキュラムは、柔軟かつ国際レベルで広く認識されているアメリカ式教育モデルと集中的なタイ式教育モデルの組み合わせに基づいている。

国立シンガポール大学付属数理高校では、言語学、ヒューマニズム、一般教養、そしてスポーツとともに数理スキルを一体化しており、KMIDS は同高校で実施されている学習コンセプトを採用した。

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

KMIDS はまた、国際教育基準の管理と取り決めに関し、ルアムルディー・インターナショナルスクールからの協力を受けた。

KMIDS の目玉として他にも「スマート・クラスルーム」という環境があり、教室には定期的に更新される先進の補助教材がたくさん備わっている。

現代科学技術スキルを持つベテラン教員は、生徒が効果的に学習できるよう、生徒の日々の習慣の中で彼らが現代科学技術を学び、活用するよう導く。

Suchatvee 学長は「アメリカとタイの教育システムを組み合わせ、能動的学習の環境下で教育を提供することによって、KMIDS は、高度な教育を続け、タイや国際的な職場で働く高い能力を有する学生を輩出していく。」と述べ、

「我々は真の 21 世紀世代を輩出していく。」と付け加えた。

（2016 年 5 月 31 日　The Nation 紙）

■タイ高等教育員会（OHEC）幹部らによる第 3 回タイーフィリピン・オフサイト・ミーティング

バンコクのパトゥムワン・プリンセスホテルで開催された会議に、タイ高等教育委員会（OHEC）事務局長の Aporn Kaenwong 氏とフィリピン高等教育委員会（CHED）Patricia B. Licuanan 氏が両国の代表として出席した。

両機関は教育開発政策やその進捗に関して情報交換を行った。OHEC は国の競争力強化において高等教育の役割を重視している。政府と教育省の政策の効果的な稼働に向け、OHEC の方針は以下の重要な事業を強化することを可能とする。

・高等教育機関を世界レベルの大学に発展させる事業

・共同教育事業を通じた卒業生の職務能力の開発

・高等教育を通じた人材育成事業

・大学間の新グループの再分析戦略の調整事業

・教員養成事業

CHED はまた、教育の質の改善、特にフィリピンでの信望を他の ASEAN 各国に転移させる仕組みに重点を置いてきたフィリピンの教育機関に関して情報提供を行った。以前、フィリピンの基礎教育期間は 10 年間であったが、学習者成績重視型カリキュラムが採用される 2016 年度以降、その期間は 12 年間に整備された。

フィリピンのジャーナルの引用検索データベースの開発のための予算に割り当てられた。

今回の会議では、主に以下の 3 つの事項について協力することが合意された。

・生徒、教員、教育マネジメント、そしてタイとフィリピンの高等教育機関間の共同教育の交流奨励と促進。

・タイとフィリピンの学術的信望の促進を検討するワーキンググループを立ち上げ、両国の高等教育部門担当者は、そのワーキンググループに加わる。

・タイとフィリピンの高等教育機関の国内および国際的カリキュラムに関するデータの交換。これを実施することで高等教育機関が認定されていないカリキュラムを採用することを防ぐ。

さらに、OHEC と CHED は、両国間の高等教育関連事業に関する協定作りの可能性について協議した。この件については、CHED が主催する次回の会議で詳細に協議される予定である。

（2016 年 6 月 6 日　タイ高等教育省 HP）

■投資家を呼び込む新規事業

デジタル部門を強力に支援する政策によって、タイで新たに立ち上げられたテクノロジー産業がデジタル時代で成功の兆しを示している。

「テクノロジー新規事業は、高価値経済を目指す”Thailand 4.0”の最も重要な原動力となっており、世界的なベンチャー資本家達の関心を集めている。」と、タイテクノロジースタートアップ協会は述べた。

新しく会長に指名された Vachara Aemavat 氏は「現地のテクノロジー新規事業の価値は、今後 2 年間にわたり 10 億米ドルまで急増する見込みで、今年は 100 の新規事業を通じて 100 億バーツに上昇すると見込まれている。」と述べ、

「我が協会は、その部門で ASEAN の他国と肩を並べられるようにしたい。」、

「我々はまた、新規事業・ベンチャー資本家・政府間のより大きな協力によって、Startup Thailand4.0 の活性化段階にある。」と続けた。

同協会はテクノロジー新規事業に対し、そのコンセプトやビジネスの拡大方法について知識提供を行う予定である。

タイのテクノロジー新規事業は、ここ 2 年で生じ、それを「第 1 時代」と称した。同産業は、テクノロジーエコシステムをより大きく発展させながら、現在、第 2 時代に突入しようとしている。

Vachara 氏は「タイには、加速器とインキュベーター、つまり、新規事業の拡大をより加速させ、正し

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

い方向へかじを取る手助けをする企業や団体がもっと必要である。」と述べた。

同協会副会長の Teerachart Kortrakul 氏は、条件を満たさない企業が市場に参入して過剰供給を起こさないよう、テクノロジー新規事業ビジネスを管理する措置を取るよう政府に促した。

また、「タイの新規事業は、ASEAN の他国に依然として遅れを取っている。それは、タイには明確かつ強固な法的枠組みがなく、これによって投資が妨げられている。」とも述べた。

タイベンチャー協会会長の Thanapong Na Ranong 氏は「25 のベンチャー資本企業が過去 2 年間で、タイ国内の新規事業に対し、併せて 1 億米ドル投資した。」と述べた。

それらのベンチャー資本企業の約半数がタイの投資家であった。

同氏は、利益を上げる能力向上よりも資本市場の規模を検討することで、株式市場に上場する新規事業に対し、独自の基準を開発するよう政府に促した。

タイの新規事業ビジネスを促進・強化するため、タイベンチャー協会は、昨日、タイテクノロジースタートアップ協会とともに MoU に署名した。

タイテクノロジースタートアップ協会の前会長である Patai Paduangtin 氏は「タイの投資委員会による課税・非課税のインセンティブを利用することができるなど政府からの強力な支援のおかげで、現地のテクノロジー新規事業は成長段階にある。」と述べた。

専門家によると、タイの新規事業環境が直面している課題は、起業家がグローバルあるいは地域的な発想ができないということである。

政府は、目標とされた 10 の産業及び新規事業に対し、ベンチャー資本ファンドや民間の投資信託に対する配当税や所得税を 10 年間免除することに同意した。

（2016 年 6 月 9 日　Bangkok Post 紙）

■基準を満たさない PhD コースが調査の引き金に

タイ高等教育委員会（OHEC）は、博士課程教育の教育水準を維持し、大学が提供する基準未満の博士課程研究プログラムを排除するための試みとして、タイ国全域の大学で博士課程の基準を調査する特別委員会を先日設置した。

この委員会は、国内全域の博士課程の質に関する懸念に応えて活動してきた。これは、昨年、大学に入学した PhD 学生の数が 25,000 人以上に急増したためで、2008 年の 1,380 人と比較すると 10 年弱で 18 倍に増加したことになる。

OHEC のデータによると、学生が進むことができる PhD プログラムは、現在、タイの 33 大学で少なくとも 1,000 コースが存在する。

OHEC 事務局長の Arporn Kaenwong 氏は、通常は最低 3 年間を要する博士課程で、いくつかの機関の学生らは現在、わずか 1 年間で博士号の取得が可能であるという情報を同委員会が入手し、また、多くの大学は明らかに国のニーズへの対応としてというよりも、むしろお金儲けのために、それらのコースを提供し始めたことを明らかにした。

Arporn 氏は「PhD 卒業生数の増加の裏には、博士課程プログラム数と博士課程へ入学した学生数を管理するための手段がないという理由がある。」と述べた。また、同氏は「大学は現在、博士課程プログラムを立ち上げるために大学職員の既存の予備要員をあてにすることはできないが、関心を引く分野の専門家を雇用することは可能である。」とも述べ、

「近年では、博士課程を立ち上げるために、大学側としてはカリキュラムを作成し、学生から提出された論文を審査する委員会の委員を務める関連分野の PhD 取得者はわずか 3 名いればよい。」

「さらに各大学は、新規プログラム立ち上げやそのプログラムの質を決定する独自の評議会も有している。」「OHEC は地方分権一括法によってそれらを管理することができなかった。」と続けた。

「そのような課程を開講するという決定は、主に各大学の評議会の責務であるため、OHEC は博士課程の質を厳しく監視することはできないでいる。我々ができることは、大学が定員数以上に受け入れを行っていないかどうか、あるいは大学側が要求する有資格の教員数が実際に満たされているかどうかということを調査する事後監査評価を実施することである。」

「OHEC の特別委員会は、基準を満たさないコースを提供している疑いのある大学で、複数の博士課程プログラムの調査をすでに開始した。」と述べた。同委員会は、近いうちにその結果を OHEC に報告する予定である。

同氏は、仮に大学が基準未満のコースを提供していると発見された場合、その問題が解決するまで、一時的に学生の新規採用は停止されると説明した。

（2016 年 6 月 18 日　Nation 紙）

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

■チュラロンコン大学がタイの高等教育機関部門でトップに

Quacquarelli Symonds（QS）社による最新のアジア大学ランキングにおいて、チュラロンコン大学が順位を上げ、再びタイでトップの大学となった。

先週発表された最新の QS アジア大学ランキングで、チュラロンコン大学は 100 ポイント中 69.8 ポイントを獲得し、昨年の 53 位から 45 位へ順位を上げた。

同大学はタイにおいて 9 年間連続でトップをキープしている。

QS 社は、そのリストでアジア 17 ヵ国の 920 大学をランキングしている。

同ランキングでタイ 2 番目の大学はマヒドン大学で、62.5 ポイントを獲得し全体では 61 位であった。

タマサート大学は 47.4 ポイントで 101 位、これより僅かな差でチェンマイ大学は 47 ポイントで 104 位であった。

カセサート大学は 40.9 ポイントで 129 位、一方、キングモンクット・トンブリエ科大学は 35 ポイントで 161 位に位置した。

その他のタイの大学では、コンケン大学が 34.8 ポイントで 165 位、プリンスオブソンクラ大学が 31.8 ポイントで 185 位となった。

国立シンガポール大学は 100 ポイントで 3 年連続全体 1 位となり、香港大学が 98.5 ポイントでそれに続いた。

一方、シンガポールの南洋理工大学は 1 順位差で敗れ、98.4 ポイントで 3 位に終わった。

QS 社はロンドンを拠点とする教育・職業に関するコンサルタント会社で、同様の手法を用いて、同社による世界ランキングと同様、アジアのランキングも作成しているが、その際いくつか追加の指標を用い、アジアのランキングに適した重み付けを行っている。

この指標一式は、その地域の専門家と関係者との協議によって開発されたもので、できる限り利用可能なデータを用い、アジアの大学にとって重要な優先事項を反映するよう設定されている。

QS 社は今年、アジアのトップ大学リストを拡大し、同リストには昨年より 50 校多い 350 校が掲載されている。同社はまた、他の側面から分析するために別の測定基準（PhD を所有するスタッフ）も追加した。

（2016 年 6 月 19 日　Bangkok Post 紙）

■アジア大学ランキングでタイの大学が順位を下げる

最新のアジア優良大学リストは対象を 200 校に拡大したが、タイの高等教育機関でランクインしたのはわずか 7 校であった。

全体的に見ると、タイの大学の順位は著しく低下した。トップ 50 にはどの大学もランクインせず、トップ 100 には 2 校がランクインしたのみであった。最も結果が良かったのは、90 位にランキングされたマヒドン大学であった。その次はキングモンクット・トンブリエ科大学で、一昨年は 50 位、昨年は 55 位、今年は 98 位だった。

残りの 5 大学は下位 100 校（100-200 位）で、それぞれチェンマイ大学が 141-150 位、チュラロンコン大学が 151-160 位、スラナリー大学が 161-170 位であった。

コンケン大学とプリンスオブソンクラ大学はともに 181-190 位だった。

昨年まで、Times Higher Education によるこの有名なアジア大学ランキングでは、高等教育機関 100 校が掲載されていた。

Times Higher Education のランキング編集者の Phil Baty 氏は「アジアの優良大学リストにタイの大学が 7 校しかランクインせず、トップ 100 にタイが大した影響を与えていないということは残念だ。」と述べた。

国立大学は、多くの地方大学よりグローバルな見通しをより強めているが、国立大学の研究環境に対する評価は低い。

Times Higher Education は、政府の高等教育への投資責任の弱化を招いてしまった 2013-14 の政治的危機もあり、近年、タイの大学は前進するよう努力してきたものと考えている。

Baty 氏は次のようにも述べた。「タイ政府の国立研究大学事業は 2009 年以降、研究機関に資金を投入しており、科学論文は近年増加している。だが、2013-14 年のタイの政治的危機によって国立大学の活動は妨げられ、政府の高等教育への投資政策は、同じ ASEAN メンバーであるシンガポールに比べ弱化した。」

「このランキングには、欧米のエリート校に挑み始め勢いのある大学ばかりで、タイは取り残されるわけにはいかない。」

Times Higher Education は、世界レベルの大学を推進するよう策定した国の戦略は、アジア全域で当たり前のものとなってきたと指摘した。例えば、中国は、北京大学と清華大学を超エリート校にすることを目標とした 985 プロジェクトを開始した。

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

同 2 大学は、アジア大学ランキング 2016 でそれぞれ 2 位と 5 位にランキングされた。

北京大学はシンガポールの南洋理工大学と 2 位の座を分け合い、1 位の国立シンガポール大学に迫った。

（2016 年 6 月 21 日　The Nation 紙）

■大学には 14,000 人の指導教員が必要と OVEC が警鐘　－技術コースの人気に伴い求められるスペシャリスト－

タイ教育省職業教育委員会事務局（OVEC）は Dapong Ratanasuwan 教育大臣に対し、国内にある 425 の国立職業学校の教員不足を解消するため、追加で 14,000 人の教員を採用する計画を承認するよう求めた。

OVEC の Chaipreuk Sereerak 事務局長は「学生の入学の急激な増加によって、多くの職業学校が複数学科で深刻な教員不足に直面している。」

「職業学校の多くは、自動車工学、電気工学、電子工学、溶接、自動化工学、建設の分野で教員が不足しており、これらの分野では専門的で経験豊富な教員が求められる。」と述べた。

現在、国立職業学校 425 校に入学している学生は約 675,000 人で、タイ国内中にある 461 校の私立職業学校を含めると、その数は 100 万人を超えるであろう。

同氏によると「昨年、300,000 人を超える学生が職業コースに申し込んだが、これは 2014 年から 26%増となっている。」とのことで、

「職業学生数の増加は職業教育に関する政策に起因しており、その政策は産業部門で急増している需要に追いつくよう、スキルの高い人材をもっと輩出することを狙いとしている。」

「その政策が職業コースがもっと人気を得られるよう後押ししているため、タイの技術教育のイメージは改善された。」と述べ

「多くの学生は、労働市場では高いスキルを有する人材の需要が高いため、職業コースの学位を目指すことで仕事への明るい見通し持つことができると気付いた。そのため、多くの学生は一般的な学校ではなく職業学校へ入学することを選択する。」と続けた。

また、「2014 年の職業学生と一般学生の比は 39:61 であったが、上記の理由によって昨年は 42:58 へとシフトした。そして、これはここ 9 年間で最も高い水準である。」とつけ加えた。

同氏は次のようにも述べた。「職業学生の数が急速に伸びていることはわかるであろうが、教員の数は依然として約 25,000 人のままで、これはタイが現在求めている教員-生徒比 1:20 よりも低いことになる。」

「さらに、10,000 人以上の職業指導教員が今年末までに定年に向かい、これは結果的に職業指導教員の急激な不足をもたらす。そのため、この状況はさらに悪化するかもしれない。」

「OVEC は、今年末までに職業学生の数を一般大学の学生数と同等まで引き上げるとする長期目標を設定し、最終的には 2018 年までに職業学校と一般大学への入学者数比を 60:40 にするため、この問題には至急措置を講ずる必要がある。」

「教員の不足を迅速かつ適切に解決しなければ、教育システムを後退させる慢性的な問題となってしまう恐れがある。」

「より多くの教員を雇用することは別として、技術訓練用の設備に備えて多くの資金が必要となる。」

「OVEC は教育大臣とともにこの要求を避けてきており、回答を待っている。」

（2016 年 6 月 27 日　Bangkok Post 紙）

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

日本学術振興会バンコク研究連絡センター　アクセス＆コンタクト

アクセス

高架鉄道（BTS）Asoke 駅、1 番出口から徒歩 5 分
地下鉄（MRT）Sukhumvit 駅、1 番出口から徒歩 5 分

コンタクト

1016/1, 10th floor, Serm-mit Tower, 159
Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand
Tel +66-2-661-6533　Fax +66-2-661-6535
Website: http://jsps-th.org　Email: jspsbkk@jsps-th.org
facebook: JSPSBangkok

■ 表紙写真紹介

Luang Phabang（ルアンパバーン、ラオス）

ラオス北部のカーン川とメコン川の合流地点に位置する緑豊かな街で、市街地自体が文化遺産としてユネスコの世界遺産に登録されている。
写真は托鉢の様子で、仏教僧たちが夜明けとともに鉢を持って練り歩き、沿道に並んだ人々から一握りほどの食べ物を受け取る。托鉢は毎朝欠かさず行われ、敬虔な仏教国らしい光景でルアンパバーンの一日は始まる。
ルアンパバーンには「プーシーの丘」、「パクウー洞窟」や「クアンシーの滝」などの有名なスポットもあり、どこも壮大な景色を全身で感じることができる。この街には非常にゆったりとした時間が流れており、牧歌的な風景を眺めているだけで、とても穏やかな気分になる。

（一部参照：ラオス情報文化観光省）

■ 編集後記

今回の「バンコクの風」では、在タイ日本国大使館一等書記官 恩賀一氏より、科学技術イノベーション分野での日タイの取組についてご寄稿いただきました。現在、タイでは同分野の発展に政府レベルで取り組んでおり、前頁でも紹介しました「人材育成円卓会議」には産官学の関係者が数多く参加しており、大変注目を集めています。今後も当センターの HP や本稿を通じて、タイ国内の科学技術イノベーション分野に関する情報についても発信していきたいと思います。
また、恩賀書記官にはお忙しい中、貴重なお時間を割いて本稿のためにご執筆いただきましたことをこの場を借りてお礼申し上げます。

さて話は変わりますが、冒頭のページの写真で我々センター職員はピンクとブルーのポロシャツを着ています。「JSPS 主催事業説明会の開催」のページをご覧いただいてお気付きの方もいらっしゃるかもしれませんが、今年度より当センターでは JSPS の事業説明を行う際は、必ずこのユニフォームを着ており、山下センター長の広報活動（Facebook）の効果もあり、現在タイ国内でじわじわと浸透しています。
今後もこのポロシャツとともに JSPS の活動を多くの方に知っていただけるよう努めていきたいと思います。

（バンコク研究連絡センター 国際協力員　大田　敏雄）

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.